

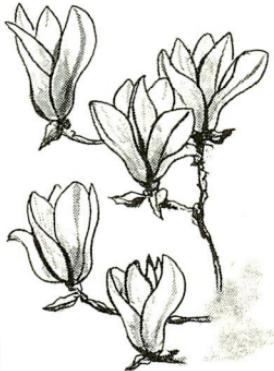
みめぐみの

第21部



みめぐみの

第21部



15

大谷光道著

目次

親鸞聖人（その二）……………2

観音様のお告げ……………3

「肉食妻帶」……………11

「非僧非俗」……………16

さらに「有僧有俗」へ……………22

読者の頁……………28

あとがき……………31

親鸞聖人（その二）

親鸞聖人が觀音様のお告げに遇われる
ことによつて、念佛の教えによる極樂往
生の道に向かわれたのだということを聞
いていただきましたが、このお告げには
もう一つの大切なお導きがありました。

それはこのお告げが、聖人の新しい生活
スタイルを生み出す原動力となつた、といふ点です。今からそのあたりにつ
いて、お話しします。



昨年六月「薪流会」で講演

觀音様のお告げ

親鸞聖人は二十九歳の時、二十年もの間修行をし、また住み慣れた比叡山でもあつたのですが、それでもどうしても納得がいかず、おそらく後ろ髪を引かれる思いで山を下り、指針を求めて京都の六角堂に百日間籠こもられます。その九十五日目の晩に聖徳太子のお導きを受け、夜明けを待つて吉水よしみずの法然上人のもとに足を運ばれ、このときを境に聖人は淨土の教えに入門されました。

ここで、「六角堂って、名前は知っているけど、どこにあるのか……。」と思われるかも知ないので、少しご案内します。JRの京都駅を降りると、京都の中心を南北に通る烏丸通りからすまがあり、この下を走る地下鉄で三駅、距離にして二キロほどで六角通りとの交差点に出ます。京のわらべ歌にある「姉・三・六角・蛸・錦・ゝゝゝ…」の「六角」です。そこに生け花の家元「池坊いけのぼう」



六角堂

の大きなビルがあり、その後ろの隠れたところにある「ちょうぱうじ項法寺」というお寺の本堂が、つまり六角堂です。

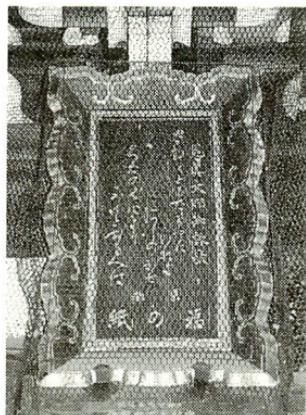
実は、池坊と六角堂は一体のもので、小野妹子に始まる六角堂の住職が、わが国の生け花の中心となつてこられたのだ

と聞いています。

お恥ずかしいことですが、私もまだお参りしたことがなく——やつぱり、灯台もと暗し。いつでも行けると思つていると駄目ですね——この機会にお参りしてきました。



見真大師（親鸞聖人）夢想の像



親鸞聖人の「御詠歌」



へそ石



本堂のご本尊は身の丈一寸八分（約五・五^{ナセン}）の如意輪觀世音菩薩像、右側のお厨子には親鸞聖人像、左側のお厨子には聖徳太子の二歳像が安置されています。親鸞聖人像がいつからここにおいでになるのかはわかりませんが、もちろんお告げよりもずっとあとから——当たり前です——だと思います。

また、本堂手前には「へそ石」というのがあって、昔から京都の中心とされているものです。

〔筆者註〕この聖徳太子のお導きの内容がいったい何だったのかについて、『第二十部』をお配りしたあとで有力な学者の説（赤松俊秀著『本願寺聖人伝絵序説』）があるのを見つけました。ずっと以前はこの説はなく、歴史の研究が進んでいるのを私だけが知らなかつたようです。不勉強を反省しています。それは、「以前は別の時期だと考えられていた觀音様のお告げと聖徳太子のお導きが同じものだつた」ということで、そうなると、親鸞聖人が法然上人のもとに走られた——聖人のご生涯でもきわめて重要な節目——直接

の動機がこの観音様のお告げだったということになります。もともと、聖徳太子は観音様の生まれ変わりとされていますが、このお告げは聖人が特に聖徳太子を「和國の教主」（日本のお釈迦様）と仰がれたこととも深い関係があるものと思われます。」

では、観音様（救世菩薩）のお告げについてのもう一つの大切な部分——親鸞聖人の生活スタイル——を見てみましょう。

建仁元年（一説に三年）四月五日夜寅の時（午前四時）、親鸞聖人が夢のお告げに遇われた。ある本には次のように書いてある。「六角堂の救世菩薩が厳かな氣高い僧の形で現れて、白い袈裟をお召しになり大きな白蓮華に正座して、聖人に告げて仰つた。

『行者宿報設女犯 我成玉女身被犯 一生之間能莊嚴 臨終引導生極樂』

ぎょうじやしうくぼうせつによほん
行者宿報設女犯 行者（親鸞）よ。前世になしたそなたの善惡の行いの

報いで、たとえ僧としての不淫戒を破つて女性と交わることになったとしても、

我成玉女身被犯

私が玉のような女の身となつて、そなたの妻となつてあげよう。

一生之間能莊嚴

一生の間、間違ひなく氣高く嚴かでいさせるよう、そなたを盛り立て、

臨終引導生極樂

臨終に当たつては、そなたを導いて極楽に生まれさせてあげよう。

さらに、『これは私の誓願である。そなたはこの趣旨を説き広めて、一切の生あるものに聞かせよ。』と。そのとき聖人は、夢の中にありながら、御堂の正面にあたる東方を見ると、そびえ立つ山々があり、その高山に数千、数万、数億もの有情^{うじょう}が群がり集まつてゐると見えた。そして、お告げにしたがつて、この文の心をその山に集まつてゐる有情に対

して説き聞かせ、それが終わつたと思つたら夢から覚めた。」

この記録を開いて夢のお告げをよくよく考へるに、まったく真宗が繁盛する奇瑞であり念佛が広く興る兆しである。

——以下略——

（覚如上人作『御伝鈔』上巻第三段を意訳、本文は末尾参照）

もともと、仏教では僧侶は生涯女性と交わることなく独身生活を通すのが鉄則でした。にもかかわらず、一般の人と同じ生活をするのでなければその苦しみも悲しみもわからず、教えを浸透させることができないのではないかという思いが、これ以前から聖人のお心の中にひつかかっていたものと想像されます。そこで、このお告げにより今までのもやもやが一挙に吹つ飛んだのではないでしようか。そこでさらに「何億とも知れない生きとし生けるものに説き聞かせよ。」というお示しが加わり、このような生き方にいつそうの確信を得られたのです。

このわずか七字四句の偈げ（漢詩）の中に、在家での生活をしながら念佛の求道者ぐどうしゃとして信心を深めていくという、真宗僧侶のお手本が示されているよう思います。

それにしても、自分の妻を觀音様の化身として拝むことができるというのは素晴らしいことです、これはたいへんなことです。ここだけの話、私など「鬼」には見えてもなかなか觀音様というのはね（笑）。笑つておられるのは、思い当たる節がありなんですね（大笑）。安心しました。

宗祖以後今日まで、私ども真宗の坊主は都合の良いところだけ宗祖の真似をして、妻さいたい帯するのを当たり前として来ましたが、ご先祖が長期間苦しい修行をし、またさんざん悩み抜かれた末の結論であることを肝に銘じなければならぬと、今お話ししながら改めて深く感じ入っているところです。

私は十歳のとき父から得度を受けましたが、その後いろんな人から「修行が大変やろ？」と聞かれ、返事ができず、心の中で「修行って……？」とい

つも考えては見るものの、それらしいイメージが涌いてこなかつたのを思い出します。ただ、お御堂みどうでの勤めとなると一時間も正座しなければなりませんので、足の痛いことときたら脂汗が出て、息も詰まる思いでした。そこで、「これは確かに修行や。でも、やっぱり違うな。」くらいのことしか考えられなかつたものです。

「肉食妻帶」

妻帶と同時に肉を食べる生活——つまり、在家の生活、いわゆる普通の生活——を、「肉食妻帶にくじき」と言います。

初期のころの仏教では、僧は乞食こうじき（托鉢たくはつ）によつて毎日の糧を得ていたので、供養された（差し出された）ものは肉であつても食べることを許されていて、南方アジアの仏教では今でも同じように行われているようです。しかし大乗仏教が興り、慈悲の精神を重視して一切の肉食を避けるようになつて、

特に中国では肉と臭い野菜を食べない（精進）^{（じょうじん）}ようになり、これが日本にも波及していました。

親鸞聖人の肉食妻帯は有名ですが、それは聖人が公然と——つまり、教えの上からも自信を持つて——妻帯されたからでしょう。さつきお話ししたように、特段の修行をする必要のない凡夫^{（ぼんぶ）}のための教えであることなど、念佛によつて往生・成仏を願う僧侶——厳密に言うと宗教家——は、妻帯してもかまわないという確信を示されたということです。

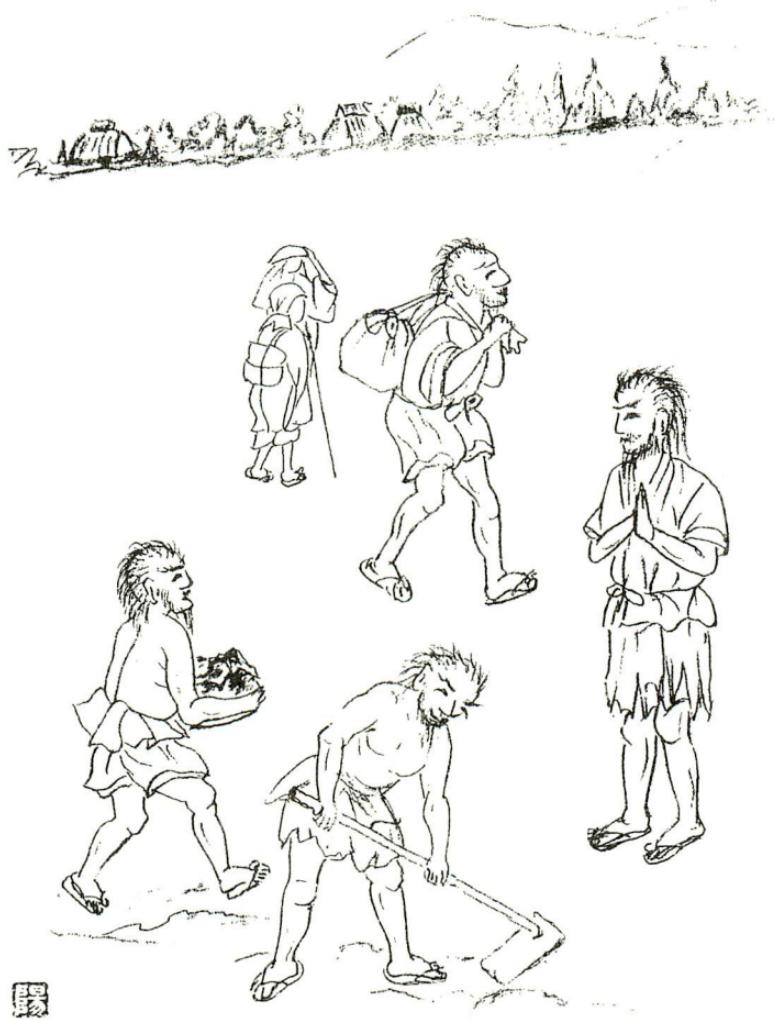
僧侶の妻帯は聖人が最初というのではなく、はるかに平安時代にまでさかのぼります。「沙弥^{（しゃみ）}」と呼ばれる人たちがそれです。沙弥とはもともと七歳から十九歳までの、僧に付いて雑用をしながら修行する「見習い僧」のことでしたが、正式に僧となつていない「私度^{（しよど）}の沙弥」や、形は僧でも妻子を養い一般の仕事についている「在家の沙弥」などがありました。

「親鸞聖人は『我はこれ賀古^{（かこ）}の教信沙弥^{（きょうしん）}の定^{（じょう）}』（ありさま、ようす、状態）

なり。』と口癖のように仰っていた。（覺如上人作『改邪鈔』）ことから、沙弥の生活を送った教信という人に強くあこがれておられたのがわかります。また、時宗の開祖・一遍上人（1239-1289）も同じく教信沙弥を慕われていたと言われます。

教信沙弥という人について伝わるプロファイルは、次のようです。

『平安初期の人（?-866）で、もと唯識（心理学）や因明（論理学）に精通した興福寺（法相宗）の優秀な学僧で、将来の有望なエリートだった。当時の特権階級だった貴族を中心とした仏教界のあり方や、名声を求める僧たちの行き方に納得できず、自分自身の極楽往生と衆生済度が第一であると考え、寺を離れ各地を巡り、一般庶民の中に念佛を広める。そして播州賀古（今の兵庫県加古川市）に庵を結ぶ。髪を剃らず、袈裟、法衣を着ず、妻帯して田畠を耕作し、あるいは旅人の荷を運びながら生活し、休むことなく阿弥陀仏の名号を称えていたので、人々は阿弥陀丸と呼んだ。』



教信沙弥

このように、あらゆる形や枠にとらわれず、しかし自己の内には極楽往生を一筋に求め、人々には生活を助け念仏を勧めるという教信沙弥の生き方が、聖人を強く惹くものだつたのでしよう。

また、親鸞聖人は、「某〔それがし〕親鸞〕閉眼せば、賀茂河にいれて魚にあたふべし」と仰って、「肉体を軽んじて信心を重視せよ」と、お説きになりました。これは覚如上人がその著『改邪鈔』で「信心を無視して葬式を重視しすぎる風潮」を批判する中で紹介された、聖人のお言葉です。

聖人の亡くなられた後、そのご遺骸を実際には加茂川に捨てるということはありませんでしたが、教信沙弥はこれを地で行つた人でした。教信沙弥の遺言を守つた妻子は、その遺体を荒野に捨て、鳥や獸が食い荒らしたのですが、首から上は傷つけられることなくそのまま残されていたと伝えられます。のちの人は、鳥や獸は教信の徳のため、その顔には敬意を払つたのだと言い伝えています。

「非僧非俗」

「肉食妻帯」や「ひぞうひぞく」と言えば、親鸞聖人の代名詞のようになつてしまつてゐる感がありますが、その原型はやはり教信沙弥にあると言えるでしょう。

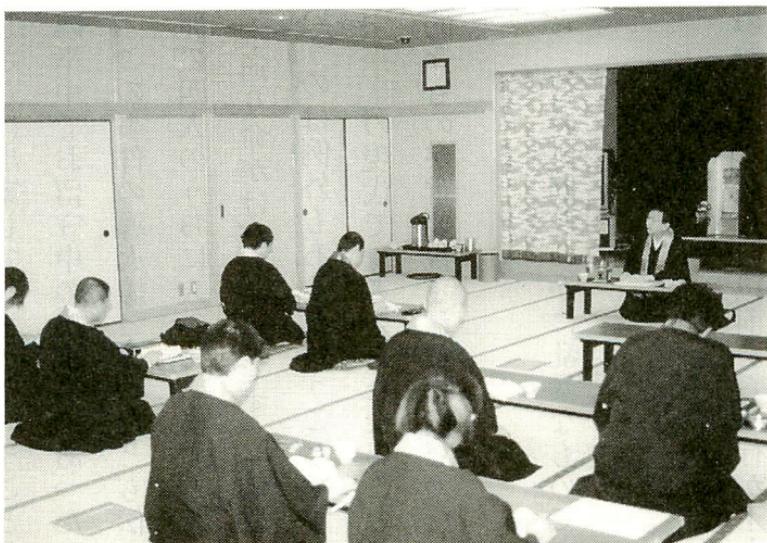
「非僧非俗」は「僧に非ず、俗に非ず」で、文字通り「僧でもなく、俗でもない」ということですが、有名な「じょうげん承元の法難」について、聖人がその主著『教行信証』の巻末に述べられる中にはじめて出て来る言葉です。

承元の法難というのは、げんきゅう元久二年（1205）興福寺の僧侶たちが専修念佛の不法九箇条をあげて念佛を停止させるよう朝廷に圧力をかけ、これによつてその二年後の承元元年（1207）法然上人とその門弟たちが処刑されたのを言います。死罪（死刑）四人、流罪八人。法然上人は土佐、親鸞聖人は越後に流れられます。

当時としては新興宗教であつた法然上人の吉水草庵は、既成宗教である南都（奈良）北嶺（比叡山）からつねににらまれていました。

たとえば、法然門下には安樂房と住蓮房じゅうれんぼうといふ美声の持ち主がいて、『往生礼讚』らいさんの声明のすばらしさが評判になつて集まる人々が群を成すという盛況ぶりなど、既成教団として決して見過ごすことのできないことだつたでしょう。

ここに集まつた人たちの中に松虫・鈴虫という後鳥羽上皇に仕えてい



た女官二人がいて、念佛の教えに帰依しさらに出家してしまうということがありました。たまたま上皇は熊野にご臨幸中でお留守中の出来事であつたこともあります。上皇の逆鱗げきりんに触れたことが、この事件の導火線となつたとも伝えられております。安樂房・住蓮房は死罪の四人のうちに入っています。

このように、念佛を広めることは文字通り命がけだったのです。「信教の自由」が一応当たり前——「一応」というのは例外もあるということですが、それについてはまた別の機会に述べます——の現代では考えられないことですが、見方を変えれば、それほど精神的なものが重要視される時代だつたとも言えるんじゃないでしょうか。

いま、聖人のお書きになつたものから、この処罰がいかに乱暴なものであつたかを伺つて見ましょう。

しづかに考えてみると、聖道門の教えは、久しい以前から修行が下火

となつて覚る人が減つているが、淨土真宗という道は今盛んに広まつて
いる。

ところが奈良や比叡山の寺々の僧侶たちは、教法を見分ける眼がない
ので真実と方便の区別ができない。京都の儒学者たちも、修行の方法の
良し悪しの見分けができず、邪道と正しい仏教を区別することもできず
にいる。それで興福寺の学僧たちは、後鳥羽上皇と土御門天皇の時代だ
った承元元年（1207）二月上旬に、念佛禁制を訴えたのである。主上
（天皇）も臣下（家来）も、仏法にそむき正義に違つて、怒りを成し怨
みを結ぶにいたつた。

このため真宗の教えを盛んにしてくださつた法然上人とその門下の僧
たちを、罪が妥当かどうかも考えずむやみに死罪にし、あるいは僧を辞
めさせ俗人の名前をつけて流罪に処したのであつた。私もその一人であ
る。だから、私はすでに僧でもなければ俗でもない（非僧非俗）。それ

で「禿とく」の字をもつて姓としたのである。

——以下略——

（『教行信証』卷末の一部を意訳）

流罪にするために僧の身分を奪われたので、聖人は「非僧」と仰ったのですが、同時に「だからといって俗にもなりきれない」、その気持ちを「非俗」と表現されたのです。そして、「だから、禿の字をもつて姓としたのだ。」とも仰っています。

「禿」というのは「はげる」という字ですが、このころは「はげる」というよりも、髪を短く切りそろえて結ばないでいる子供の髪型を言つたり、頭を剃ることもなく髪を括るのでもない放つたらかしのボサボサ頭を指し、さつきの沙弥の姿そのものです。

「非俗」と仰る親鸞聖人の内心には、「永らく求め続けていたものをやつとの思いで法然上人のもとで見つけ、念佛という無上の喜びに遇えたのに。」

という、仏法と離れる事のできない身の上を表現されたのだと思えます。

それに加えて、「そもそもまた大師聖人（法然上人）もし流刑に処せられたまはずは、われもまた配所におもむかんや。もしわれ配所におもむかずんば、なによりてか辺鄙へんびの群類を化せん。」（『御伝鈔』）——師・法然上人とのご縁から流罪になつたからこそ辺鄙な地の人々を教化することができたのだ——と。これは「非俗」の大切なもう半面です。自ら信じたものを他人にも教えて信じてもらおうとすること——これを「自信教人信」と言います——は、自然の成り行きであり、そのまま宗教家の本分を尽くすことです。

この「自信教人信」は浄土真宗でよく使う言葉ですが、臨濟宗で仰る「上じょう求菩ぐぼ提、下化衆生げけしゅじょう」と同じような内容だとお考へいただいても良いと思います。またわざわざこのような専門用語を使わなくても、もつと広く他のどんな場面にも共通の事柄だと言えます。例えば、大学の先生は自分の研究と学生の指導という両面が必要ですし、伝統工芸家でいえば、自分の作品を作る

こととお弟子さんの養成という二つの仕事を欠かすことが出来ないのと同じです。

さらに「有僧有俗」へ

流罪という、この一事がその後の聖人にとつて決定的な意味を持つたのは間違いないことです。罪人とされてしまっての生活はもちろん、かねてからあこがれていた教信沙弥と同じ生活になつたのもその結果であり、恵信尼と結婚されたのもこの配流の地・越後だつしたことなど、目に見える変化だけでも大きなものがあります。

流罪など、もちろん喜ぶべきことではありません。しかし、その逆境を「有り難い境遇」として受け止められたところに、親鸞聖人のすごさがあります。「非僧非俗」という言葉を使いながら、その実は「有僧^う有俗^{そう}」。「有僧」という、真の僧としての自覚、仏に仕える者としての深い責任感、を感じ

じます。また一方、「有俗」という、仏教に触れたことのない人に對しても、その人の悩みを我が悩みとして共に悩むことのできる温かさ、を感じます。

ここで比べること自体恐れ多いのですが、私などどちらにも煮え切らないのこそ——つまり字面通りの非僧非俗——、やはり本物の非僧非俗でしようね（笑）。「あなた、お坊さんなんですね。」と聞かれると、「えー、まあ。でも、真宗の坊主ですから、修行も戒律もないし、普通一般の方々と同じですよ。」と、「非僧」を強調する。「ああ、そうなんですか。お坊さんでなく、俗世の我々と同じなんですね。」とすんなり納得されてしまって、「いえ、そういうでもないんです。やはり、仏に仕える身ですから、一般の方々とは違った宗教家としての自覚が必要なんです。」と、非俗に逃げ込む。情けないことです。

『御伝鈔』上巻第三段

建仁二年 辛酉 四月五日の夜寅の時、聖人（親鸞）夢想の告げま

しましき。かの『記』にいはく、

「六角堂の救世菩薩、顏容端嚴の聖僧の形を示現して、白衲の袈裟を着服せしめ、広大の白蓮華に端坐して、善信（親鸞）に告命してのたまはく、『行者宿報設女犯 我成玉女身被犯 一生之間能莊嚴 臨終引導生極樂』といへり。救世菩薩、善信にのたまはく、『これはこれわが誓願なり。善信この誓願の旨趣を宣説して、一切群生にきかしむべし』と云々。そのとき善信夢のうちにありながら、御堂の正面にして東方をみれば、峨々たる岳山あり。その高山に数千万億の有情群集せりとみゆ。そのとき告命のごとく、この文のこころを、かの山にあつまれる有情に對して説ききかしめをはるとおぼえて、夢さめをはりぬ」と云々。

つらつらこの記録を披^{ひら}きてかの夢想を案ずるに、ひとへに真宗繁昌の奇瑞、念佛弘興の表示なり。しかれば聖人（親鸞）、後の時仰せられてのたまはく、「佛教むかし西天（印度）よりおこりて、經論いま東土（日本）に伝はる。これひとへに上宮太子（聖德太子）の広徳、山よりもたかく海よりもふかし。わが朝欽明天皇の御宇に、これをわたされしによりて、すなはち淨土の正依經論等このときに来至す。儲君（聖德太子）もし厚恩を施したまはずは、凡愚いかでか弘誓にあふことを得ん。救世菩薩はすなはち儲君の本地なれば、垂迹^{すいしゃく}興法^{こうぼう}の願をあらはさんがために本地の尊容をしめすところなり。

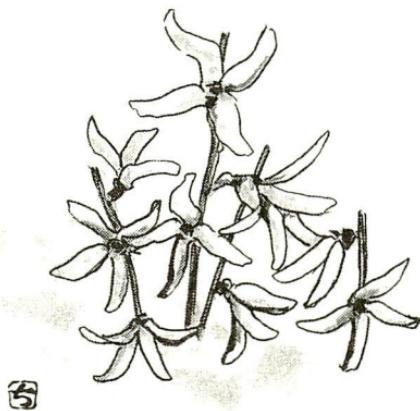
そもそもまた大師聖人・源空（法然上人）もし流刑に処せられたまはずは、われもまた配所におもむかんや。もしわれ配所におもむかずんば、なによりてか辺鄙の群類を化せん。これなほ師教の恩致なり。大師聖人すなはち勢至の化身、太子また觀音の垂迹なり。このゆゑにわれ二菩

薩の引導に順じて、如來の本願をひろむるにあり。真宗これによりて興じ、念仏これによりてさかんなり。これしかしながら聖者の教誨によりて、さらに愚昧の今案をかまへず、かの二大士の重願、ただ一仏名を専念するにたれり。今の行者、錯りて脇士に事あやま^{つか}ふることなけれ、ただちに本仏（阿彌陀仏）を仰ぐべし」と云々。かるがゆゑに聖人親鸞、傍らに皇太子（聖徳太子）を崇めたまふ。けだしこれ仏法弘通のおほいなる恩を謝せんがためなり。

——つづく——

『第二十部』から始めた昨年六月の薪流会でのお話は今回で完結するつもりでしたが、その当日、内容を欲張りすぎたため、さらに次号にまたがることになってしまいました。

次号では、「末法」を中心にする予定です（筆者）。



《参考文献》

- ・『教行信証の意訳と解説』
- ・「教信寺」ホームページ

高木昭良著

永田文昌堂

感想意見

富山県 河合 寛さん

毎回わかり易くありがたく読んでいます。第二十部の親鸞聖人のお話の文章を何度も読み返しております。

その中で十八頁から二十頁に機についてよくわかるように書かれていて今までに聞いたことのない勝機、劣機に石を例にされて述べてあり、よくわからせてもらいました。仏様から頂戴する、それ以外に仏になる道はない……

ありがとうございました第二十一部を楽しみにしています。

合掌

東京都町田市 諸戸 貞昭さん

『みめぐみの』第二十部に「バカである自分を見つけること……そして、仏になる種は全部阿弥陀様、仏様から頂戴する……と心が定つて、気がついたらお念佛を称えている」と明快に説かれています。誠に有り難い事です。

みめぐみの刊行委員会からのお知らせ

〔折り込みハガキについて〕

今回から折り込みハガキの体裁が変わりました。

これまで「読者の貢」の投稿用ハガキとして折り込んできましたが、バックナンバー（既刊号）の購入希望や追加注文のお問い合わせが多数寄せられることから、「注文欄」を付け加えました。

従来通りご意見・ご感想、ご質問などもご記入頂けます。こちらも隨時誌面の許す限り掲載して参ります。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。

『みめぐみの』一冊の価格は二百円（税込）です。

○一冊～四冊＝送料実費、振替手数料（七十円）はご負担下さい

※送料 一冊＝一二〇円、二冊＝一六〇円、三冊＝一八〇円、四冊＝二一〇円

○五冊～九冊＝送料実費、振替手数料は不要です

※送料 五～六冊＝一一〇円、七～九冊＝一九〇円

○十冊以上 ＝ 送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

あとがき

みめぐみの刊行委員会

今回も前回に引き続き昨年六月「薪流会」での講演をまとめて頂きました。前回は親鸞聖人の開かれた浄土真宗は、凡夫、つまり「いづれの行も及びがたき身」である私を見いだすことと、そのような私が助かるには念佛してお淨土に行ける身となるしかなことだと、締めくくられました。

今回は、親鸞聖人の宗教家としての生活スタイルについて、「非僧非俗」のお話を中心にしながらさらに「有僧有俗」にまでお話を進めて下さっています。

また、表紙絵は『第十一部』から塔のシルエットと野花が続きましたが、表紙を担当下さる禮子裏方は「何故か宗教というと暗いイメージを連想する方が多いので、温かく明るい雰囲気をもつ、ひょうたんを思いつきました。」と、今回からひょうたんに包まれた絵を描いて下さいます。

折り込みハガキの体裁が変わりました。バックナンバーや追加注文の申し込みにご利用下さい（詳細は読者の頁）。引き続き「ご意見・ご感想、ご質問」も募集しております。ふるってお寄せ下さい。

みめぐみの 第21部

2004年3月5日 印刷
2004年3月10日 発行

定価 200円

著 者 大 谷 光 道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒600 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754
-8167 本願寺寺務所内

TEL. 075(351)3555 FAX. 075(351)3120
振替口座 01060-5-56990

印 刷 株 中 外 日 報 社



みめじみの刊行委員会刊